

学芸員の研究発表など

日本のプラネタリウムと博物館制度

渡部 義弥(学芸員)

「博物館研究」(2021年6月号)

日本のプラネタリウムが世界でも2位の設置数を持ち、全国津々浦々にある市民から高く評価されかつ身近な理系の社会教育専門施設であることを紹介し、立ち位置が児童生徒を中心とする学校教育の補完から生涯学習施設として、あらゆる世代の学習の場として変化している実情を紹介した。実物資料はなくとも、シミュレーターとしての価値があり、また博物館で注目される交流、手法開発、普及などの実践で強みを持つことも紹介した。これらをふまえ、現在の日本の博物館制度の改訂において、時に複合施設など一部分であるプラネタリウムが、博物館として確かな位置づけを持ち、持続発展の根拠になるような制度になるように要望した。

研究発表「理工系博物館における歴史的機器の公開課題」

吉岡 克己(総務企画課長)

科学技術社会論(STS)学会第20回年次研究大会(2021年12月5日)

STS学会オーガナイズドセッション「歴史的な機器を活用した演示・科学教育の試み」について、オーガナイザーの多久和(東京工業大学)から依頼を受けて発表した。本セッションは歴史的機器を活用した科学教育を具体的に分析するために、その大学や博物館での活用事例をもとに課題や手法を整理しようとするもので、吉岡からは生涯学習拠点である理工系博物館の現場からその現状と事例をもとにした課題を提起し、吉岡の取組みをもとに議論した。(発表内容は別途予稿集にも掲載)

研究論文「演示実験の工夫と改良—スペクトル観察の場合—」

長谷川 能三(学芸員)

物理教育 第69巻 第4号 2021 日本物理教育学会(2021年12月9日)

大阪市立科学館のサイエンスショーは約3ヶ月毎にテーマを変えているが、定番の実験や人気のあったものなど、数年毎に再演するテーマもある。しかし、全く同じ内容・実験ではなく、さまざまな工夫や改良をしていっている。これらは、観覧者に見やすくするためや伝えたい内容をわかりやすくするためだけでなく、社会の変化に対応するためという場合もある。本論文では、スペクトルを観察する実験を例として、工夫や改良した点をそれぞれの意図に分類して論じた。